

慶應義塾大学

保健管理センター年報

Annual Report of Keio University Health Center



2020

慶應義塾大学保健管理センター年報

Annual Report of Keio University Health Center

2020

目 次

巻頭言	森 正明
-----	------

I 本編

第1. 大学保健管理業務	3
第2. 一貫教育校保健管理業務	7
第3. 感染症対策	9
第4. 環境衛生業務	13
第5. 産業保健活動	15
第6. 教育	16
第7. 研究	17
(第8. 会議, 第9. 関連資料は資料編のみ)	
第10. 慶應義塾診療所	18

II 資料編

第1. 大学保健管理業務	
1. 年間主要業務	19
(1) 本部(日吉)	
(2) 三田分室	
(3) 湘南藤沢分室(看護医療学部分室を含む)	
(4) 信濃町分室	
(5) 矢上分室	
(6) 芝共立分室	
2. 学生定期健康診断	25
(1) 学生定期健康診断実施項目一覧	
(2) 学生定期健康診断受診状況	
(3) 学生定期健康診断の流れ	
(4) 学生定期健康診断 生活区分, 障害者の状況	
(5) 学生定期健康診断 受検後医師面接件数	
(6) 学生定期健康診断 結果報告書配布数・WEB 閲覧件数	
3. 教職員定期生活習慣病健康診断	31
(1) 教職員定期生活習慣病健康診断実施項目一覧	
(2) 教職員定期生活習慣病健康診断受診状況	
(3) 教職員健康診断の流れ	

(4) 教職員定期健康診断集計	
(5) 医師面接実施状況	
(6) メンタルヘルスチェック	
(7) 消化器系検査集計	
(8) 女性教職員検診集計	
(9) 参考資料	
4. その他の健康診断	43
(1) 特定業務従事者の健康診断	
(2) 特殊健康診断	
(3) 遺伝子組換え実験業務従事者の健康診断	
5. 各種行事等救護状況	44
6. 特定保健指導	45
7. 教職員カウンセリング利用者数	45
8. その他の活動	45

第2. 一貫教育校保健管理業務

1. 年間主要業務	47
(1) 幼稚舎分室	
(2) 横浜初等部分室	
(3) 普通部分室	
(4) 中等部分室	
(5) 湘南藤沢中等部分室	
(6) 湘南藤沢高等部分室	
(7) 高等学校分室	
(8) 志木高等学校分室	
(9) 女子高等学校分室	
2. 保健室利用状況	56
(1) 幼稚舎分室	
(2) 横浜初等部分室	
(3) 普通部分室	
(4) 中等部分室	
(5) 湘南藤沢中等部・高等部分室	
(6) 医療機関に依頼した外傷内訳	
(幼稚舎分室・横浜初等部分室・普通部分室・中等部分室・湘南藤沢中等部分室)	
(7) 精神保健相談	
(幼稚舎分室・横浜初等部分室・普通部分室・中等部分室・湘南藤沢中等部分室)	
(8) 高等学校分室	
(9) 志木高等学校分室	
(10) 女子高等学校分室	
(11) 精神保健相談	
(高等学校分室・志木高等学校分室・女子高等学校分室・湘南藤沢高等部分室)	
(12) 保健室利用一覧	

3. 児童・生徒定期健康診断	69
(1) 小学校（幼稚舎分室・横浜初等部分室）・ 中学校（普通部分室・中等部分室・湘南藤沢中等部分室）	
(2) 高校（高等学校分室・志木高等学校分室・女子高等学校分室・湘南藤沢高等部分室）	
第3. 感染症対策	
1. 結核接触者健康診断	75
2. 結核スクリーニング	76
(1) 対象および地区別受検者数	
(2) IGRA（インターフェロン γ 遊離試験）検査結果	
(3) IGRA 検査後措置件数	
3. ウイルス性疾患抗体価検査（麻疹・流行性耳下腺炎・風疹・水痘）	77
(1) 大学	
(2) 一貫教育校	
(3) 教職員	
4. 予防接種	80
(1) B型肝炎ワクチン	
(2) インフルエンザワクチン	
5. 血液曝露対応 年間対応数および事後措置	81
6. 学外施設実習前便培養検査	81
7. 学校において予防すべき感染症対応，および院内感染症対応（登校・就業許可面接）	81
8. 新型コロナウイルス感染症関連対応および事後措置	82
(1) 教職員，病院教職員，大学生	
(2) 一貫教育校教職員，生徒，児童	
第4. 環境衛生業務	
1. 教室等の調査	85
2. 食堂の調査	87
第5. 産業保健活動	
1. 労働衛生管理体制	89
2. 衛生委員会	89
3. 職場巡視	89
4. 就業判定	90
5. 産業医面接	91
6. 労働安全衛生教育	91
7. 労働者の心の健康保持	91
第6. 教育	
1. 大学講義	93
2. 予防医療センター	97
3. 集団保健衛生教育	98

第7. 研究	
1. 保健管理センター教職員研究業績	103
2. 保健管理センター研究会	107
3. 保健管理センター研修会	107
4. 部門ブロック別研修	107
第8. 会議	
1. 保健管理センター運営委員会	109
2. 業務連絡会	109
3. 幹事会	110
4. 人事委員会	110
5. 看護職総会	110
6. 対外的活動	110
7. ワーキンググループ	110
第9. 関連資料	
1. 慶應義塾組織図	111
2. 慶應義塾大学保健管理センター規程	112
3. 大学保健管理センター人事委員会内規	115
4. 保健管理センター教職員一覧	116
5. 保健管理センター人事	117
6. 保健管理センター配置図	118
第10. 慶應義塾診療所	
1. 診療所について	119
2. 慶應義塾診療所規程	120
3. 診療所等受診者数	122
4. 精神・神経科受診者数	123
5. 外部医療機関依頼数	123
6. 診断書, 公文書発行など	123
7. 慶應義塾診療所管理委員会記録	124
編集後記	今村江里子

巻 頭 言

慶應義塾大学保健管理センター

所長・教授 森 正 明

2020年度は新型コロナウイルス感染症の流行により、保健管理センターの業務の予定や形態の変更にも明け暮れる1年でした。

まず、健康診断への影響ですが、年度初めの恒例業務である学生健康診断はキャンパスが閉鎖されて、ほぼすべての学生がオンラインで授業を受けている状態では、従来のように学生を集めて実施することはできず、しかし一方で、就学における配慮の必要性については早期に確認して対応する必要があることから、本学内の共通認証システムを利用してWEBでの問診システムを構築し、その結果を確認して必要な対象者にはメールによる指導やオンラインでの面接指導を実施しました。その次に実習先から求められることが多い胸部X線検査に関しては結果の提出時期などを考慮しながら、各キャンパスで必要と判断された最小限の項目とともに時期を分散させて実施しました。秋の教職員健康診断も混雑を避けるため項目を絞って実施しました。一貫教育校生徒の健康診断も時期を遅らせて実施することになりました。学生および教職員健康診断における未受診者が例年より多かったことや信濃町キャンパスでは特定業務従事者健康診断を実施できなかったことなどの課題がありましたが、実施した健康診断においてはクラスターの発生などはなく、安全に行うことができました。

感染症対策への影響では新型コロナウイルス感染症対策（学内の感染対策指導、罹患報告への対応、接触者への指示、信濃町キャンパスではPCR検査やワクチン接種の支援など）で多忙を極めた1年でした。また、例年実施している医療系学部新入生を対象としたHBワクチン接種の日程もキャンパス閉鎖とオンライン授業で学生が登校しない状況が続いたために予定が大幅に遅れ、一部が2021年度にずれ込む状況が発生しました。その他、学校感染症の登校許可証明書を新型コロナウイルス感染症用に改訂しました。従来は授業への出席は登校が前提で、学校感染症による欠席が学事で不利な扱いを受けないように欠席届としての役割が重要視されていた証明書でしたが、隔離施設等においても授業にはオンラインで出席していたので欠席届としては不要という学生が多かったことは新しい経験でした。

環境衛生業務への影響として、環境調査においては、学生が登校していないキャンパスでは調査の意義が少ないため、オンライン環境に問題がないか関連部署に問い合わせるなどで代替するような状況でした。食堂調査においても例年の6月には営業をしていない施設が多かったため、時期を遅らせて実施しました。

産業保健活動への影響では、多くのキャンパスで衛生委員会が感染対策のためオンライン会議で開催されるようになり、参加しやすくなったと思われます。一方で、関係者が集まって実施する職場巡視は感染対策上好ましくないと判断され、実施方法を検討する必要がある状況でした。

教育関係への影響ですが、例年、300名以上が履修する設置講座に関して、3密の回避が難しいことから、オンライン授業に変更しました。文化祭前の衛生講習会などの集団衛生教育は文化祭がオンライン開催などに変更されて、食品の取り扱いなどがなくなったため実施しませんでした。一貫教育校で開催されていたセミナーはオンラインによる情報提供になりました。

研究に関しては本誌の資料でご紹介している業績等のほか、実施中の研究では匿名化したデータを用いた観察研究をホームページで公表していますので、ご参照ください。また、学内外の他施設との共同研究にも継続的に取り組んでおります。

各地区の保健管理センターのスタッフが集まって開催していた会議は、すべてオンラインで開催することになりました。

2020年度の主な人事的な動きですが、医師では4月1日付で小児科の内田敬子医師が准教授に昇格しました。また、3月31日付で小児科の有馬ふじ代医師が退任しました。

今後もスタッフ一同、一致協力して新しい時代に向けて、保健管理センターの活動を構築してまいりたいと思います。関係者の皆様には、引き続きご指導、ご協力をお願い申し上げます。なお、今回の年報につきましても、ご意見などがありましたら遠慮なくお寄せください。

I 本編

第 1. 大学保健管理業務

第 2. 一貫教育校保健管理業務

第 3. 感染症対策

第 4. 環境衛生業務

第 5. 産業保健活動

第 6. 教育

第 7. 研究

(第 8. 会議, 第 9. 関連資料は資料編のみ)

第10. 慶應義塾診療所

第 1．大学保健管理業務

1. 学生定期健康診断

（1）学生定期健康診断実施項目一覧

例年、本健診は、学校保健安全法施行規則（保安則）第六条第 1 項にある検査項目、第 4 項にある除外可能項目を鑑み、法定項目を満たすべく施行されている。しかし、本年は新型コロナウイルス感染症流行の影響で、密集を形成してはいけないという制約の下、一部の対象者を除き、例年行っていた項目は検尿のみに留め、代替に WEB による問診を行った。医師面接は外部医療機関への紹介も含む。尚、医学部の学部 2～6 年、修士 1 年、博士 1 年、看護学部 2 年は、学生部の協力を得て、学生に時間差で集合してもらい、密集を形成することなく健診を行うことができた。胸部 X 線写真（CXR）は、新入生、前年度からの呼吸器疾患または循環器疾患管理者の一部、教職課程専攻者、医療系学部生（薬学部は新入生および実習で必要な学生のみ）、その他指示があった者では必須になっているが、通常健診を行わなかった該当者に対して、日吉、三田、SFC で適宜機会を設け撮影を行った。CXR 撮影は予約システムの利用で、やはり密集を形成することなく終了することができた。

（2）学生定期健康診断受診状況

表 A に、学部生のデータを学部、学年、男女別に記した。学部生受診者数（同表 A）は 19,738 名（在籍者 28,998 名、受診率 68.1%，男子 65.0%，女子 73.2%，昨年全体の受診率 84.4%）であった。大学院修士課程生（同表イ）、大学院博士課程生（同表ウ）、専門職学位課程生（同表エ）の受診率は夫々、71.4%（昨年；84.9%）、40.1%（62.2%）、34.8%（66.2%）であった。

本年度はすべての群で受診率は例年に比べ低かった。従来の形式の健診でなく、WEB 問診による健診であったことの影響と考える。但し、例年、受診率が高い医療系学部では、本年もほぼ通常の形で健診を行うことができた医学部 2～6 年、看護医療学部 2 年のみならず、WEB 問診で代替えた「医学部 1 年、看護医療学部 1，3，4 年、薬学部全学年」の受診率も高かった。

（3）学生定期健康診断の流れ

このスキームは学校保健安全法第 13 条および保安則第 9 条に従ったものである。本年はほぼ例年通りの健診を行った医学部の学部 2～6 年、修士、博士、看護学部 2 年のみにこのスキームが適応された。他の対象者は WEB 問診で不調を訴えた者へ看護職による個別相談や医師面接を行い、必要な場合外部医療機関を紹介するなどの措置がとられた。

毎年、本図にある C 判定者数の統計をとっているが、本年は、その判定システムの適用が限定的であったので、統計はとっていない。

（4）学生定期健康診断—生活区分、身体障害の状況

WEB 問診形式であったこと、体育実技が無く、授業もオンライン形式が多かったことより、生活区分での制限を申告する者の数は例年より少なかった。一方、障害者手帳を有する者の申告数は例年より多かった。（2018 年度 6 名、2019 年度 2 名、本年度 48 名）。その理由として、例年は、障害を有する者が健診に参加しにくいとため、その申告を行う機会がなかったという可能性がある。もしそのような問題点があったとすれば、WEB 問診は来年度以降も続行するので、その問題は解決され则认为。例年本表に「現

病歴」の統計も挿入されているが、本年はその調査を行っていない。

(5) 学生定期健康診断—医師面接件数

本来は医師面接を含めた二次検査の集計が報告されるが、本年度の健診で二次検査を受けた者は限定的であったため、医師面接数のみをカウントした。

(6) 学生定期健康診断—結果報告書配布数・WEB 閲覧件数

本健診結果返却は本センター各地区の窓口で返却する方法と 2007 年度から開始し、2013 年度からはスマートフォンでもアクセス可能になった WEB 閲覧の方法がある。例年数百件の窓口返却があるが、本年は 2 件であった。これは新型コロナウイルス感染症拡大の影響で学校が閉鎖され、本センター窓口に来る人が少なかったためと考える。一方、WEB も例年 3 万件ほどであるが、本年は 21,024 件であった本年の受診率の低さに対応した結果と考える。

本年は新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、本センターは多くの学部で密集を形成する従来型の学生健診の挙行を断念した。しかし、その代替として「本センターが開発した WEB 問診システム」を用いた健診が行われた。この WEB 問診は受診者の健康情報を収集するもので、法の決まりを充足するものではないが、やむを得ない措置であったと考える。尚、本問診を通常の健診と併用した場合、事前の情報収集による健診の効率化(時間短縮)や精度上昇に寄与することが期待される。よって、来年度以降も通常の健診が行えたとしても継続利用していく予定である。また、一部の学部の健診、および全学部の追加の CXR 撮影では予約制が導入され、密集を回避することができた。医学部、看護医療学部の健診においては、学生部の協力による時間差集合通達の予約制であったが、追加の CXR 撮影時には、「WEB 予約システム」が投入され、両者とも十分機能することが確認された。健診での混雑緩和は、新型コロナウイルス感染症拡大とは関係なく過去からの課題であったが、予約システムの利用がその課題を解決することが明確になった。また、本年度は、学校が閉鎖されていたが、2007 年度から使用している「本センターが(過去に)開発した健診結果 WEB 閲覧システム」も非常に有益であった。本年度は「コロナ禍」という語句に象徴されるように、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で通常の健診が挙行できなかった。しかし、WEB を用いた種々のシステムの駆使で健診が実施され、そのみならず、本センターが開発、獲得した新しい技術の利用で、従来の健診の常識を打破した新しいスタイルの健診が挙行される可能性も生まれた。本センターにとっては「禍」によって大きな成長をなし得ることができた年度であったと考える。

(横山裕一)

2. 教職員定期生活習慣病健康診断

（1）受診状況

2020 年度の慶應義塾全体の受診率は 96.8%であり、2019 年度(97.8%)に比べ 1%低下した。地区別受診率は志木地区が 100.0%、信濃町地区が 99.8%、芝共立地区が 97.4%、矢上地区が 95.7%、三田地区が 94.3%、日吉地区が 92.5%、湘南藤沢地区が 90.0%であった。志木地区、信濃町地区以外の地区で 2019 年度に比べ受診率は低下したが、原因として、新型コロナウイルス感染症の流行により教職員の受診が困難であったことが推測された。一貫教育校所属教職員の受診率は 100%であった。

（2）生活習慣病健康診断集計

身長・体重、腹囲、視力、聴力、胸部 X 線検査、血圧、検尿、心電図の有所見者の割合は 2018 年度と大きな変化はなかった。その内、視力の C 判定(右または左の視力が 0.7 未満)が 19.0%、血圧の C 判定(収縮期血圧 140mmHg 以上または拡張期血圧 90mmHg 以上)が 11.0%と 2020 年度も 10%を超えていた。また、新型コロナウイルス感染症の感染対策で、心電図が一部の地区で省略、心音聴取が原則省略されたため、2019 年度に比べ検査人数が減少した。

血液検査の有所見者の割合は 2019 年度と大きな変化はなく、血液検査で異常値が認められる割合が高い検査は脂質関係と肝臓関係であった。TG 300mg/dL 以上、または HDL コレステロール 34mg/dL 以下、または LDL コレステロール 160mg/dL 以上が脂質関係の C 判定となるが、男性で 16.8%、女性で 9.2%、合計で 12.8%であった。TB 2.5U/L 以上、または AST 60U/L 以上、または ALT 60U/L 以上、または ALP 136U/L 以上、または γ -GTP 160U/L 以上(男性)、90U/L 以上(女性)が肝臓関係の C 判定となるが、男性で 10.1%、女性で 2.8%、合計で 6.3%であった。

（3）特定健康診査

40 歳以上 65 歳未満の受診者は 3,507 人(男性 1,829 人、女性 1,678 人)であった。40 歳以上 65 歳未満のメタボリックシンドロームと診断された人は、男性で 329 人(18.0%)、女性で 48 人(2.9%)、合計で 377 人(10.7%)であった。2019 年度(受診者数 3,476 人中、男性 324 人(17.4%)、女性 57 人(3.5%)、合計 381 人(11.0%))と比べ、大きな変化はなかった。積極的支援レベルが男性で 231 人(12.6%)、女性で 46 人(2.7%)、合計で 277 人(7.9%)であった。動機付け支援レベルが男性で 228 人(12.5%)、女性で 101 人(6.0%)、合計で 329 人(9.4%)であった。

（4）その他

定期健康診断後の管理状況は、面接指示者 989 人に対し、面接を実施した件数は 415 人であった。メンタルヘルスチェックは 2,810 人が受検した。年齢 40 歳以上の健保加入者(3,799 人)は消化器系検査の受検資格があり、上部消化管検査受検者は 1,084 人(28.5%)、腹部超音波検査は 1,272 人(33.5%)が受検した。2020 年度の受検率は 2019 年度の受検率(上部消化管 41.0%、腹部超音波検査 47.9%)に比べ大幅に低下したが、原因として、新型コロナウイルス感染症の流行により教職員の受検が困難であったことが推測された。年齢 35 歳以上の健保加入者(4,628 人)は大腸がんスクリーニング(便潜血検査)の受検資格があり、2,027 人(43.8%)が受検した。予防医学協会の便潜血検査受検者(1,804 人)の内、陽性者は 88 人(4.4%)であった。

(西村知泰)

3. その他の活動等

(1) その他の健康診断

毎年度、常時深夜業に従事する者等を対象とする特定業務従事者の健康診断を信濃町地区で実施していたが、2020 年度は新型コロナウイルス感染症流行のため、実施出来なかった。また、電離放射線取扱者、特定化学物質取扱者、有機溶剤取扱者、鉛取扱者、遺伝子組み換え実験教務従事者に対して、特殊健康診断を実施したが、新型コロナウイルス感染症流行のため、矢上地区の学生に関しては、特定化学物質取扱者、有機溶剤取扱者、鉛取扱者に対する特殊健康診断を実施出来なかった。

(2) 各種行事等の救護状況

保健管理センターでは、各種行事(入学式、卒業式、入学試験等)の救護活動を行っている。2020 年度は新型コロナウイルス感染症流行のため、救護を必要とする行事が少なく、主に入学試験関連の救護活動を行った。救護件数としては、大学学部入学試験が一番多く、57 件(日吉本部 43 件、三田分室 14 件)であった。

(3) 特定保健指導

2020 年度の特定保健指導の初回指導は、113 件実施されたが、新型コロナウイルス感染症流行の影響もあり、2019 年度(199 件)に比べ減少した。

(4) 教職員カウンセリング

新型コロナウイルス感染症流行のため、対面での教職員カウンセリングが実施困難となり、2020 年度は 7 件のみで、2019 年度(32 件)に比べ減少した。

(5) その他の活動

新型コロナウイルス感染症流行により、教職員・学生の登校機会が減少したため、応急処置・保健相談等は、投薬(市販薬)は 10 件、処置(外傷の消毒、湿布等の処置、爪きり使用、検温等)は 121 件、ベッド休養は 51 件で、2019 年度(投薬 85 件、処置 901 件、ベッド休養 772 件)に比べ、著明に減少した。保健相談等(受付窓口や電話での相談、投薬・処置・ベッド休養が生じない健康相談、保健指導、病院案内等)も 46 件で、2019 年度(474 件)に比べ著明に減少した。

(西村知泰)

第2．一貫教育校保健管理業務

1. 小・中学校

(1) 2020 年定期健康診断のまとめ（小・中学校）

2020 年度は、新型コロナウイルス感染症対策の長期学校閉鎖措置（2020 年 4 月～6 月）に伴い、定期健康診断を 2020 年 9 月～10 月に実施した。感染予防対策のため、感染リスクの高い眼科検診，耳鼻咽喉科検診，歯科検診，および小学生の血液検査は実施していない。2020 年度は定期健康診断の実施時期に、全国の地域，学校で大きなばらつきがあるため，全国平均値との比較は行っていない。

ア．保健統計調査

(ア) 栄養

肥満傾向(肥満度+20%以上)の頻度は, 幼稚舎(男 5.8%, 女 0.7%), 横浜初等部(男 3.1%, 女 1.2%), 普通部(男 11.3%), 中等部(男 6.0%, 女 2.1%), 湘南藤沢中等部(男 6.1%, 女 0.7%)において, 湘南藤沢中等部女子を除いて, 一貫教育小中学校では男女ともに昨年度に比べて増加を認め, すべての一貫教育小中学校において男女ともに過去 5 年間の各校の平均を上回った。

栄養不良(やせ傾向)(肥満度-20%以下)の頻度は, 幼稚舎(男 1.6%, 女 3.5%), 横浜初等部(男 2.6%, 女 2.4%), 普通部(男 3.3%), 中等部(男 6.7%, 女 8.4%), 湘南藤沢中等部(男 4.1%, 女 3.5%)において, 中等部および湘南藤沢中等部では男女ともに昨年度に比べて増加を認め, 特に女子における増加が顕著であった。

一貫教育小中学校では男女ともに肥満傾向の児童・生徒が増加し, 中学校女子ではやせ傾向の生徒の増加が目立った。新型コロナウイルス感染症予防対策の長期学校閉鎖の影響が疑われる。

(イ) 視力

裸眼視力 1.0 未満の頻度は, 幼稚舎(男 32.1%, 女 35.5%), 横浜初等部(男 38.7%, 女 51.5%), 普通部(男 74.4%), 中等部(男 71.5%, 女 64.8%), 湘南藤沢中等部(男 69.9%, 女 78.0%)において, 中等部を除いて, 一貫教育小中学校では男女ともに昨年度に比べて増加を認め, 過去 5 年間の各校の平均を上回った。

一貫教育小中学校では男女ともに視力 1.0 未満の児童・生徒が増加し, 新型コロナウイルス感染症予防対策の長期学校閉鎖の影響が疑われる。

イ．結核健診

計 37 人を対象に精密検査(胸部X線撮影)を実施した。受検理由は, BCG未接種(21 人), 海外結核高蔓延国での居住歴(14 人)が多かった。最終結果は全員異常なしであった。

ウ．血液検査結果

中学 1 年生のウイルス抗体価検査では, 流行性耳下腺炎抗体陰性者(普通部 71.1%, 中等部 58.3%, 湘南藤沢中等部 61.4%)および水痘ウイルス抗体陰性者(普通部 26.3%, 中等部 24.4%, 湘南藤沢中等部 20.9%)が多く, 抗体陰性者に対してワクチン接種の推奨をおこなった。2020 年度は新型コロナウイルス感染症予防対策のため, 小学 1 年生の血液検査は実施していない。

(徳村光昭)

2. 高校

(1) 2020 年度定期健康診断のまとめ

ア. 保健統計調査

本年表の執筆時点において、2020 年度の学校保健統計調査（全国）は、2020 年 10 月までに回収されたデータから算出された速報値のみが公表されている。身長は、高校の男子、女子ともに、全ての学年において、全国平均値（速報値）と比較し高かった。体重は、高校の男子では湘南藤沢高等部の 3 年を除き、全国平均値（速報値）を上回っていたが、高校の女子では全ての学年において全国平均値（速報値）以下であった。

イ. 生徒定期健康診断受診・管理状況

高校の受診率はほぼ 100%であった。新型コロナウイルス感染症の影響により実施体制が整わなかったため、眼の疾病及び異常、耳鼻咽喉疾患、歯及び口腔の疾病及び異常の有無は、当該期日に実施することができなかった。高等学校では血压、血液検査の実施を見送り、女子高等学校では血液検査の実施を延期した。検尿、血液検査、血压、胸部 X 線検査の再検査対象者の割合は、昨年度と比較し大きな変化はなかった。

ウ. 血液検査結果

志木高等学校（246 人）の LDL コレステロール高値の生徒が 9 人（3.7%）で、昨年度（260 人中 3 人、1.2%）に比べ多かった。湘南藤沢高等部女子（121 人）の LDL コレステロール高値の生徒は 14 人（11.6%）と昨年度（120 人中 12 人、10%）に引き続き、他の高校と比較して多かった。また、志木高等学校と湘南藤沢高等部男子では、昨年度 0 人であった尿酸高値の生徒が、それぞれ 3 人（1.2%）、2 人（1.7%）該当した。各校におけるその他の異常値の割合は、昨年度と比較し大きな変化はなかった。

(2) 2020 年度保健室利用状況

保健室利用状況は、全ての高校で、年間来室者数、一日あたりの平均来室者数、一人あたりの平均年間来室回数が、昨年度と比較して大幅に減少した。生徒数の多い高等学校が年間来室者数 539 人、一日あたりの平均来室者数 5.5 人で 4 校中一番多かったが、一人あたりの平均年間来室回数は 0.2 回で一番少なかった。また、インフルエンザによる学級閉鎖はなかった。新型コロナウイルス感染症罹患患者発生による臨時休校措置は、高等学校で 2 日間、志木高等学校で 1 日間行われた。

精神保健相談に関しては、全ての高校で、昨年度に比べ事例数が減少した。相談内容で一番多いものは学校生活・友人関係であった。

（畔上達彦）

第3．感染症対策

本年報 2014 年 p.13-16 に示した通り、保健管理センター（本センター）の感染症対策は学校保健安全法施行規則 18 条などに従って多岐に渡って行っている。また、昨年度から、本センターは新型コロナウイルス（SARS-CoV2）の対策も行っておりその件も加筆する。

（1）結核接触者健康診断

本センターは、結核対策として、教職員へは年 1 回の教職員健診での胸部 X 線（CXP）撮影、学生へは指定学年への年 1 回の CXP 撮影、および問診を行っている。しかし、不慮の結核患者への濃厚接触が疑われた場合、追加で本健診が行われる。本健診では、排菌者からの感染拡大の有無を調べる目的で、まず Interferon-Gamma Release Assay of Tuberculosis（IGRA）を行う。本検査の事後措置としては、① 対応不要、② 定期的な胸部レントゲン（CXP）撮影、③ 潜在性結核感染症治療、④ 精査または結核症治療のための医療機関紹介の選択肢がある。本健診は 2007 年度から感染症法 17 条がその根拠となっている。主に医療従事者が対象で、2018 年度から行われた 9 例と本年度新たに加わった 1 例は、すべて大学病院のある信濃町の事例である。本稿執筆時点で継続しているものは、本年度に発生した 1 件のみである。

（2）結核スクリーニング

本センターでは、医療従事者および医療系学部生の結核感染の有無を調べるため IGRA 検査を行う。本健診は慶應義塾大学病院など、医療機関に立ち入る者の結核非感染の証明、または病院の結核菌感染ハイリスク部署勤務者の結核菌感染の早期発見を目的に行う。

対象は、大学医療系学部学生および大学院生と健康マネジメント研究科の指定学年、病院の新規採用者、他地区から病院への異動者、また病院の結核感染ハイリスク部署勤務者である

2020 年度の対象者は 838 名で、陽性者 2 名、判定保留者 1 名（0.4%）、判定不可の者なしであった。事後措置として、2 名が医療機関紹介となった。

（3）ウイルス性疾患（麻疹・流行性耳下腺炎・風疹・水痘）抗体検査

本センターは麻疹・流行性耳下腺炎・風疹・水痘の抗体検査を大学医療系学部学生の指定学年（主に新生入生）、一貫教育校生徒の指定学年、他地区から信濃町地区に異動になる教職員に行っている。対象者の詳細は各項の冒頭に示してある。本年度は新型コロナウイルス感染症流行の影響で、幼稚舎および横浜初等部では検査を行わなかった。また、医療系学部での検査施行が例年に比べ遅くなった。検査は IgG/EIA 法（一部 HI 法）で行う。各群の各ウイルス抗体陽性率は 0%～100.0%で例年通り流行性耳下腺炎の抗体陽性率が低い傾向にあった。医療系学部生、大学病院勤務者に対しては日本環境感染学会の指針（http://www.kankyokansen.org/modules/publication/index.php?content_id=17）に沿って抗体陰性の者へは 2 回、抗体値が判定保留～陽性の者へは 1 回の外部医療機関でのワクチン接種を勧奨する。医療者基準に達している者へは勧奨はしない。一方、同指針では、これらのワクチンを 2 回接種した者に対しては、それ以上の接種は不要ともしているため、その要件を満たす場合も勧奨しない。その指針に従い、本年度から医学部 4 年生の抗体価測定を中止した。加えて、その指針、また国際的なコンセンサスに従い、来年度から医療系学部生の抗体値測定を中止し、ワクチン接種回数を中心とした管理法に変更する

予定である。

(4) 予防接種

(B 型肝炎ワクチン)

本センターは B 型肝炎ウイルス (HBV) 感染予防の目的で医療機関に立ち入る大学医療系学部学生および大学院生、健康マネジメント研究科の指定学年、病院の臨床業務に携わる教職員、その他必要と認められた教員に対してワクチン接種を行う。事前に HBs 抗原抗体を測定し、どちらも陰性の場合、基礎接種の対象になり、約 6 ヶ月かけて 3 回のワクチンを接種し、最終接種の約 1 ヶ月後の HBs 抗体価が 10mIU/ml を超えれば陽転とする。非陽転者へは、追加接種を行う。過去に 3 回以上ワクチンを接種したものの時間経過で抗体が陰性化していると考えられる場合は、その者の免疫の記憶の保持を考慮し、まず 1 回の追加接種を行い、陽転すればワクチン接種終了としている。この方式の導入でワクチン接種回数が削減された。尚、米国 CDC の見解に基づき、合計 6 回以上のワクチン接種は勧めていない。2020 年度は本塾全体で 249 名の申込みがあり、435 本のワクチン接種を行った。尚、本年度は新型コロナウイルス感染症流行の影響で申し込みや接種が終了していないまたは延期されているキャンパスがあり、接種者、接種ワクチン数は例年に比べて少ない。報告された副作用は 9 件 (2.1%) で、発現率は例年並みであった。

(インフルエンザワクチン)

大学病院では 4- (2) に示した対象者に有料でインフルエンザワクチン接種を行っている。本事業は、大学病院感染制御部が中心となり、2002 年の開始当初から本センターも準備、実施に携わっている。2017 年度より予防医療研修の一環として大学病院研修医も本ワクチン接種業務に参加しており、その指導は本センター医師を含めた大学病院医師が行っている。本年度は新型コロナウイルス感染症流行を鑑み、感染制御部と信濃町 ITC が協力して開発した予約システムを利用して接種を行ったため、例年の密集を形成することなく接種を行うことができた。2020 年度の接種者は 3,809 名で例年よりやや多かった。SARS-CoV2 とインフルエンザの両方が流行する所謂 Twindemic に備え、インフルエンザワクチン接種が国際的にも推奨されていたことの影響があったと考える。

(麻疹・流行性耳下腺炎・風疹・水痘ワクチン)

本センター信濃町分室では 2018 年度より教職員を対象にした麻疹・流行性耳下腺炎・風疹・水痘の有料のワクチン接種外来を開始した。現在、月 1 回 (開催しない月もある)、予約制で行っている。現在のところ、1 枠 10 名程度の予約を取っている。

(新型コロナウイルスワクチン)

信濃町地区では医療従事者のための新型コロナウイルスワクチンが 2021 年 3 月から開始された。本事業は感染制御部が中心に行い、保健管理センターからも医師 2 名が会場に立ち合い、ワクチン接種後の体調の急変などの緊急事態に備えた。

(5) 血液曝露対応

本センターは主に、大学病院に勤務する教職員、実習生の血液曝露事故の際に、B 型肝炎 (HBV)、C 型肝炎 (HCV)、ヒト免疫不全ウイルス (HIV) の感染予防措置を行っている。尚、2019 年度から梅毒対策は中止した。曝露源が特定できて、曝露源者の許可が得られた場合、曝露源者および曝露者の 3 種感染症の状態を検査し、曝露状況のアセスメントを行い、どの対策を行うか、どの感染症のフォローアップを行うかを決定する。曝露源が特定できない場合や曝露源者から検査許可が得られない場合は、曝露者の免

疫状態と曝露状況から方針を決定する。HBV 対策はヘブスブリン 1000 単位静注とワクチン接種開始、HIV 対策はツルバダ 1 錠+アイセントレス 2 錠/日の 28 日間服用、である。HCV に対しての特定の対策はない。フォローアップは、HBV 抗原抗体、HCV 抗体、HIV 抗体、肝機能検査の中から必要なものを選び、1 ヶ月の間隔で 6 ヶ月まで、および 12 ヶ月後に採血を行う。

本年度は 50 件の報告があった。事後措置はヘブスブリンが 2 例で使用され、経過観察が、18 例で行われた。

（6）学外施設実習前便培養検査

医学部、看護学部の学生が学外実習を行うにあたり、施設によっては赤痢菌、腸管出血性大腸菌（O-157）、コレラ菌、サルモネラ菌などの保菌者でないことの確認を要求するため本センターではその検査も行う。本年度は新型コロナウイルス感染症流行の影響で一般的に医療機関での実習が自粛されていたため、本検査が行われなかった。

（7）学校において予防すべき感染症対応、および院内感染症対応（登校・就業許可面接）

学校保健安全法施行規則 18 条に「学校において予防すべき感染症」の一覧が掲げられているが、本センターはその対応も行う。その対策の基本は、感染者を学校から隔離することで、そのために、センターは感染症罹患者の就業・就学停止 / 許可を決定する。胃腸症状、発熱、発疹、眼症状、上気道を含む呼吸器症状を主訴に本センターを受診した場合、就業・就学停止とするケースがある。また専門医を紹介し、その結果で就業・就学停止とする場合がある。流行性角結膜炎、感染性腸炎、流行性角結膜炎、溶連菌感染症、インフルエンザなどの対応が多い。就業・登校許可は各疾患で設定された要件を満たしているかどうかを本センターの医師が対面で判断して決めることとしている。尚、インフルエンザは看護職による面接でも良いこととしてある。但し新型コロナウイルス感染症流行した 2020 年度はインフルエンザの顕著な流行が無く、各地区ともインフルエンザの登校許可面接対応は例年よりも少なかった。

（8）新型コロナウイルス感染症関連対応および事後措置

（大学教職員、学生、病院）

本邦では 2019 年度末以来、SARS-CoV2 感染症の流行が続いており、本センターは昨年度から引き続いて、2020 年度は年間を通し、各キャンパスでの流行を防ぐための対策を講じた。

大学の教職員、大学生には 37.5 度以上の発熱があった場合登校（就業）禁止とし、本センターへ連絡、解熱後解熱剤を服用せず 48 時間経過すれば、本センターで面接を受けた後に再登校（就業）を認めることとした（48 時間ルール）。海外からの帰国者、COVID 感染症患者との接触者は 14 日の自宅待機とした。PCR 検査が行われた場合は保健所の指示に従うこととした。

本感染症に対するハイリスクの患者を抱える大学病院がある信濃町地区では、条件を厳しくして対応している。即ち、37 度以上の発熱、または、熱が無くとも呼吸器症状があれば本センターへ連絡してもらい、登校（就業）禁止措置を徹底した。

信濃町以外の地区では、本センターへの連絡先を本センターの WEB 上に設け、発病者はそのサイトに登録することにした（一部電話対応を含む）。2019 年度～2020 年度の発熱者は 252 名、濃厚接触および帰国者は 365 名、その中で COVID と診断された者は 159 名（25.8%）であった。

信濃町分室は患者の病態把握に有利であることから、WEB システムは用いず、電話で本センターに届け出ることとした。また、COVID 患者の重症化の早期発見を目的に、登録者に対する電話による毎日の

病状確認を行った。2019 年度～2020 年度の発熱者は 896 名、濃厚接触および帰国者は 305 名、その中で COVID と診断された者は 102 名（8.5%）であった。信濃町で登録者中の COVID 患者が少なかったことは、スタッフや患者へ感染を拡大させることを危惧し、少しでも異変があれば、本センターに電話してくる者が多かったためと考えられる。尚、信濃町では年度の途中から唾液検体による PCR 検査を本センターで行うようになり、よりの確な診断が可能になった。PCR 陽性者は慶應義塾大学病院を含めた医療機関への紹介、入院、陰性者は 48 時間ルールの実施とした。しかし、PCR 陰性でも諸症状より COVID が疑われる場合、再検査や胸部 CT スキャン撮影を行い、COVID と診断したケースもあった。

COVID に関して、登校（就業）許可面接は信濃町以外の地区以外では登録者の 787 名、信濃町地区では 1,303 名に行われた。

（一貫教育校教職員、生徒、学生）

一貫教育校の学生、生徒に対しては文部科学省の通達に従って対策がなされている。COVID に関して特筆すべきは、2020 年 3 月 2 日からの全国一斉臨時休校であろう。その後、2020 年 4 月 7 日に緊急事態宣言が発令され、遠隔授業の導入などで授業が続けられた、学校によって差異はあったが、すべての一貫教育校が正常な形に戻ったのは 10 月であった。その後、2021 年 1 月 8 日に 2 回目の緊急事態宣言が発令され、一斉休校は導入されなかったが、一部のカリキュラムやクラブ活動の制限が加えられた。

本センターは 2020 年 2 月 5 日の文部科学省の事務連絡以後構築した COVID 感染症対応体制を 2020 年度も継続した。基本的には大学で行われていた対策と同様で、発熱者、体調不良者、濃厚接触者は保健管理センターへ連絡し、発熱者は解熱後解熱剤を服用せず 5 日間経過すれば、本センターで復学面接を受けた後に再登校（就業）を認めることとした。

発熱者、体調不良者の総数の統計は取っていないが、濃厚接触者は 90 名、罹患者は 28 名、復学面接は 2,504 名に行われた。復学面接者に対する罹患者の割合は 1.1%であった。武漢型の SARS-CoV2 は小児の感染率が低いことが知られ、この結果はその知見を反映している。しかし、本稿執筆時に日本での流行が増えている英国型 N501Y 変異株は、少なくとも英国では子供への感染が多くなっていることが知られ、今後、学級閉鎖、学校閉鎖を迅速に行うなどの措置が必要になる可能性がある。

（横山 裕一）

第4．環境衛生業務

学校における環境衛生管理については、学校保健安全法（2009年4月1日施行）の規定に基づき、「学校環境衛生基準」が定められている。施行後5年を経過し、環境衛生に関する新たな知見や児童生徒等の学校環境の変化を踏まえて検討が行われ、一部改正された（2018年4月1日施行）。これらの基準に基づいて、キャンパス衛生管理者、保健管理センター医師および保健師が、校内巡視および環境測定を行った。

1. 教室等の調査

（1）実施項目

ア 換気及び保温等および空気清浄度

- | | |
|-----------|--------------------------------|
| (a) 換気 | (g) 二酸化炭素 |
| (b) 湿度 | (h) 揮発性有機化合物 ^{※1} |
| (c) 相対湿度 | ホルムアルデヒド，トルエン，キシレン， |
| (d) 浮遊粉じん | パラジクロロベンゼン，エチルベンゼン， |
| (e) 気流 | スチレン |
| (f) 一酸化炭素 | (i) ダニまたはダニアレルゲン ^{※2} |

イ 採光

- | | |
|--------|----------|
| (j) 照度 | (k) まぶしさ |
|--------|----------|

ウ 騒音

- (l) 騒音レベル

エ 校内巡視

※1 2006年度より管財部から業務移行された。

※2 2010年度より実施

（2）実施日程（大学・一貫教育校の各「年間主要業務」の頁を参照）

通常は前期6～8月，後期11～1月に実施（年2回）しているが，2020年度は新型コロナウイルス感染症対策のため，各施設実施可能時期に順次行った。

（3）結果・事後措置概要

（a）温熱環境

季節により，湿度が基準値を外れる教室が散見された。教室使用時には空調設備や換気扇，加湿器を適切に使用し，教室内の環境を保つよう指導した。

（b）換気・空気清浄度

おおむね問題なかった。

（c）照度・まぶしさ

おおむね問題はなかった。

（d）騒音

おおむね問題はなかった。

(e) ダニまたはダニアレルゲン

ダニ数が基準値を超えた教室があり、掃除機を使用した清掃の徹底を指導した。

(f) 揮発性有機化合物

ホルムアルデヒドが基準値を上回る教室があり、窓を開放した換気を指導した。

(g) その他

荷物や器材の積み上げ、ゴミや私物の散乱が認められる教室があるため、教室環境の美化および整理整頓に努め、緊急時避難経路確保を行うよう指導した。

2. 食堂の調査

学校保健安全法に基づいて、食堂環境衛生検査ならびに食堂微生物検査を行い、関係所属長へ報告と改善依頼を行うとともに、食堂管理責任者へ指導を行った。なお、2020年度は新型コロナウイルス感染症対策として食堂が休業中などの施設は調査を実施しなかった。

(1) 実施項目

ア 厨房巡視・聞き取り調査

キャンパス衛生管理者、保健管理センター医師および保健師が、担当地区の食堂を巡視し、食堂施設の状況、設備およびその取扱い状況、食品の取り扱いを含む調理場内の衛生状況、従事者の衛生管理状況、検食の状況等を調査した。

調理場換気扇のほこりなどの汚れ、破損した調理器具の使用が認められた地区があり、定期的な清掃と速やかな修繕を指導した。また、調理場は高温多湿となりやすいことから空調設備の点検や避難経路確保のための整理整頓についても指導した。

イ 微生物検査

冷蔵庫、まな板、作業者手指、台ふきん、直接喫食食品、飲料水、空中浮遊菌等

(一般細菌、大腸菌、黄色ブドウ球菌、サルモネラ、腸炎ビブリオの培養検査)の検査を行った。

- (a) ふき取り検査で複数の食堂施設から一般細菌が検出された。汚染された手指から食材への二次汚染の可能性がある為、手洗い方法を見直して、手指の清潔保持の徹底に努めるよう指導した。
- (b) 台ふきんでは複数の食堂施設で一般細菌が検出された。台ふきんの頻回の交換と消毒、またふきんの使途の明確な区別を徹底する必要について指導した。
- (c) 複数の施設で加熱した食品から一般細菌が検出された。加熱によりほとんどの一般細菌は死滅するはずであり、調理後に一般細菌が付着したものと思われる。手洗いが不十分な手、または細菌が繁殖した台ふきんに触れた手で菜箸などの器具やポリ手袋等を用いて皿への盛り付けを行ったなどの可能性が考えられる。清潔保持の徹底を指導した。
- (d) 複数の施設で空中浮遊菌の数が基準値を超えており、空調設備や換気扇の清掃・点検を適宜行い空気環境の管理を行うよう指導した。

(武田彩乃)

第5．産業保健活動

労働安全衛生法及び労働安全衛生規則に基づき、次の活動を行っている。カッコ内は該当法令。

1. 労働衛生管理体制（労働安全衛生法第12条及び第13条）

慶應義塾では、事業場として大きく7地区（日吉、三田、芝共立、湘南藤沢、矢上、信濃町、志木）に分け、各地区に統括安全衛生管理者、産業医、衛生管理者を置き、教職員の健康管理等を実施している。

2. 衛生委員会（労働安全衛生法第18条）

7地区に衛生委員会が設置され、教職員の健康障害防止の基本対策などを調査・審議している。保健管理センターは各地区の登録産業医と衛生管理責任者等が産業保健の専門家として参加している。

3. 職場巡視（労働安全衛生規則第15条）

衛生委員会の活動の一環として7地区において、職場巡視を実施し、職場における安全確保状況、換気状況等を調査し、教職員の健康障害を防止するための必要な措置を講じるようにしている。保健管理センターのメンバーは施設管理を担当する管財部門のメンバーとともに職場巡視のメンバーとして参加している。

4. 就業判定（労働安全衛生法第66条第1, 2, 3項）

雇入れ時の健康診断、定期健康診断を実施している。雇入れ時の健康診断受診者数、定期健康診断受診者数はともに信濃町地区が最も多い。また信濃町地区では、例年、常時深夜業に従事する者等を対象とする特定業務従事者の健康診断も実施しているが、2020年度はCOVID-19流行のため実施出来なかった。電離放射線取扱者、特定化学物質取扱者、有機溶剤取扱者、鉛取扱者に対して特殊健康診断を、遺伝子組換え実験業務従事者に対しても健康診断を実施している。特殊健康診断判定件数、遺伝子組換え実験業務従事者健康診断判定件数共に、信濃町地区が一番多い。

5. 産業医面接（労働安全衛生規則第14条）

職場の上長や本人からの申し出があった場合と、長時間労働を行った教職員に対して、産業医による面接を行っている。具体的には、内科疾患または精神科疾患による休職後復職者、過重労働者、メンタル不調者等を対象に実施し、必要に応じて、総括安全衛生管理者に対して勧告し、又は衛生管理者に対して指導し、若しくは助言を行っている。

6. 労働安全衛生教育（労働安全衛生規則第59条）

教職員に対し、その従事する業務に関する安全又は衛生のための教育を実施している。具体的には、電離放射線使用の注意点、有機溶剤使用の注意点についてのリーフレット配布等を行っている。

7. 労働者の心の健康保持（労働安全衛生法第66条）

職業性ストレス簡易調査票（57項目）によるストレスチェックを実施し、教職員の心の健康保持を図っている。

（西村知泰）

第6．教育

1. 大学講義

保健管理センター設置講座では、非医療系学部の学生を対象として生活習慣病、感染症、薬物・飲酒の問題、メンタルの問題等、現代社会における疾病について、保健管理センターの各専門医が通年でオムニバス形式の講義を行っている。現代社会と深く関わりのある代表的な疾病について幅広い知識を得ることを目的とする。将来、Health care 関連企業に就職する学生の入門講義になるばかりでなく、健康的な生活を理解し、実践するための保健教育を目的としている。

また、体育研究所設置講座、医学部講座、看護医療学部講座、通信教育課程、学生総合センター設置科目においても講義を行い、通信教育課程については通年でレポート添削を行っている。

2. 予防医療センター

2012年8月1日より慶應義塾大学病院予防医療センターが開設され、保健管理センター専任医師は人間ドック受診者の当日結果説明および簡単な生活指導を交代で担当している。

3. 集団保健衛生教育

(1) 衛生講習会

2020年度は新型コロナウイルス感染症対策のため文化祭での飲食物提供が中止となったことから、講習会も実施しなかった。例年は、一貫教育校及び大学における文化祭、イベント等で、食品を扱う模擬店を出店する際には、保健管理センターが細菌性食中毒予防のため、①食中毒について②食材の取り扱い方③手洗いの方法④速乾性擦式手指消毒薬およびアルコール含有ウェットティッシュの使用方法等について指導を行っている。また、酒類を提供する予定のある大学生に対しては飲酒についての注意喚起も行っている。

(2) BLS（一次救命処置；Basic Life Support）講習会、AED（自動対外式除細動器；Automated External Defibrillator）講習会

慶應義塾に所属している学生、教職員および委託職員に対して救急蘇生法とAEDの使用法についての説明、指導を行っているが、2020年度は新型コロナウイルス感染症対策のため中止した。

(3) 小児・若年者の生活習慣

小児・若年者の肥満、高血圧などの生活習慣病は高率に成人の生活習慣病に移行することが知られている。そのため小児・若年者の生活習慣の修正は重要であり、一貫教育校では生活習慣是正のためのセミナーを行っている。また、生徒・保護者・教員を対象に脳震盪・精巣捻転症・熱中症・インフルエンザ等の感染症・心の問題・スポーツ障害等に関する講演会を行っている。

2020年度は新型コロナウイルス感染症対策のため休校期間、オンライン授業期間が長期に及んだことから、感染予防のみならず、休校期間中および学校再開時における心身の健康管理などについてもオンラインを活用して随時情報配信を行った

（武田彩乃）

第7．研究

保健管理センターは、慶應義塾の研究所附属機関に位置づけられ、大学・大学院生、小中高一貫教育校児童・生徒、教職員の健康管理および感染症等の管理業務に加えて、健康の保持増進のための教育や研究活動を担当している。

1. 保健管理センター教職員研究業績

(1) 受賞

- ア 日本小児内分泌学会から、井ノ口美香子の臨床研究功績に対して、2020 年度田中賞（臨床研究奨励賞）が贈られた（2020 年 10 月 24 日）。
- イ 第 31 回日本成長学会学術集会（2020 年 10 月 31 日，WEB 開催）において、「やせの若年成人女性における BMI-SD score の推移（6～20 歳）」（筆頭演者：長島由佳，共同演者：井ノ口美香子，他）が，若手優秀演題賞を受賞した。
- ウ 第 58 回全国大学保健管理研究集会（2020 年 11 月 25 日，WEB 開催）において、「大学生のインフルエンザ罹患報告と感染拡大対策」（筆頭演者：刈田未来，共同演者：當仲香，松本可愛，澁谷麻由美，高橋綾，横山裕一，森正明）が，優秀演題賞を受賞した。

(2) 著書・翻訳書・論文・学会発表

2020 年度に保健管理センター教職員が執筆した著書は 10 編，筆頭著者で発表した論文は英文誌 8 編，和文誌 19 編であった。保健管理センターの機関誌である「慶應保健研究 第 38 巻第 1 号」（2020 年 9 月 30 日発行）には，学校保健や健康管理等に関する原著論文 4 編，総説 4 編，解説 9 編が掲載された。2020 年度に保健管理センター教職員が筆頭演者となった学会発表は，国内学会 18 題であった。主な学会として，第 58 回全国大学保健管理研究集会（2020 年 11 月，WEB 開催）では健康管理や健康診断に関する一般演題 4 題が発表された。第 67 回日本学校保健学会学術大会（2020 年 11 月，愛知）は一般演題の発表を予定していたが，新型コロナウイルス感染症流行のため開催が 2021 年 11 月に延期となった。

2. 保健管理センター研究会

2020 年度は新型コロナウイルス感染症流行のため，講師を招聘しての講演会は開催しなかった。第 58 回全国大学保健管理研究集会予演会を WEB 開催した。

3. 保健管理センター研修会

「新型コロナウイルス感染症について」と題した研修会を WEB 開催した（講師：慶應義塾大学保健管理センター 康井洋介）（2021 年 3 月 25 日）。

4. 部門ブロック別研修

「コロナ禍における学生の発達障害と支援」と題した研修会を WEB 開催した（講師：世森重信（塩野義製薬株式会社ヘルスケア戦略本部 CSR 推進部こどもの未来支援室），中村麻里子（慶應義塾大学学生相談室カウンセラー），西村由貴（慶應義塾大学保健管理センター））（コメンテータ：有馬ふじ代（慶應義塾大学保健管理センター））（2020 年 12 月 24 日）。

（徳村光昭）

(第8. 会議, 第9. 関連資料は資料編のみ)

第10. 慶應義塾診療所

日吉・三田・湘南藤沢・矢上診療所受診者数は合計 1,692 件（学生 404 件，教職員 1,277 件，その他 11 件）で，前年比△1,681 件だった。新型コロナウイルス感染症予防対策によるオンライン授業が実施され，学生がキャンパスに来る機会が減っていることから，学生の受診が前年の 3 分の 1 以下となった。なお，この件数には新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い始まったオンライン（電話）診療の件数が含まれている。

精神科は矢上診療所を除く 3 診療所で診療を行っている。その合計は 535 件（学生 349 件，教職員 177 件，その他 9 件）で，前年比△275 件だった。学生の受診は年々増加する傾向があったが，前年の約 2 分の 1 となった。一方，教職員は 48 件増加した。これは教職員カウンセリングがカウンセラーの退職に伴い，一時休止している影響があった可能性がある。

（今村江里子）

Ⅱ 資料編 第7. 研究

1. 保健管理センター教職員研究業績
2. 保健管理センター研究会
3. 保健管理センター研修会
4. 部門ブロック別研修

1. 保健管理センター教職員研究業績

(1) 受賞

井ノ口美香子

1) 日本小児内分泌学会 2020 年度 田中賞（臨床研究奨励賞）

受賞理由：臨床研究功績に対して

受賞日：2020年10月24日

刈田未来，他

1) 第58回全国大学保健管理研究集会優秀演題賞

受賞理由：大学生のインフルエンザ罹患報告と感染拡大対策

受賞日：2020年11月25日

共同研究者：當仲香，松本可愛，澁谷麻由美，高橋綾，横山裕一，森正明

長島由佳，他

1) 第31回日本成長学会学術集会若手優秀演題賞

受賞理由：やせの若年成人女性におけるBMI-SD scoreの推移（6～20歳）

受賞日：2020年10月31日

共同研究者：井ノ口美香子，他

(2) 著書・翻訳書・論文・学会発表

ア 著書

1) Azegami T, et al.: Immunotherapeutic Approach to the Treatment and Prevention of Obesity. Obesity and Diabetes. Scientific Advances and Best Practice. Springer, 297-302, 2020

2) Azegami T, Nishimura T, Murai-Takeda A, Yamada-Goto N, Mori M, et al.: The distributions of hematologic and biochemical values in healthy adolescents in Japan. PLoS One, 15(11): e024227, 2020

3) 井ノ口美香子：特発性乳児高カルシウム血症。特殊ミルク治療ガイドブック。診断と治療社，93-94，2020

4) 内田敬子，他：大動脈弓の発生とその異常。新先天性心疾患を理解するための臨床心臓発生学。メジカルビュー社，205-215，2021

5) 内田敬子，他：肺動脈の発生とその異常。新先天性心疾患を理解するための臨床心臓発生学。メジカルビュー社，242-250，2021

6) 柴田映道，内田敬子，他：肺動脈性肺高血圧症の分子医学。新先天性心疾患を理解するための臨床心臓発生学。メジカルビュー社，251-260，2021

7) 南里清一郎，當仲香，他：インフルエンザの出席停止基準・期間と学級閉鎖の判断はどのようにすべきですか？。新型コロナウイルス感染症流行下のインフルエンザ診療ガイド 2020-21。日本医事新報社，216-223，2020

8) 牧野伸司，他：魚類胚を用いた心臓血管発生生物学的研究法。新版 先天性心疾患を理解するための臨床心臓発生学。株式会社メジカルビュー社，100-103，2021

9) 横山裕一：海外からの留学生の感染症（VPDs）対策。International Students（海外からの留学生）への健康管理の手引 2020（第1版）。公益社団法人 全国大学保健管理協会 国際連携委員会，16-18，2020

10) 横山裕一：海外からの留学生と COVID-19。International Students（海外からの留学生）への健康管理の手引 2020（第1版）。公益社団法人 全国大学保健管理協会 国際連携委員会，38-42，2020

イ 論文

1) Asakura T, Nishimura T, et al.: Serum Krebs von den Lungen-6 level in the disease progression and treatment of Mycobacterium avium complex lung disease. Respiriology, 26(1): 112-119. 2021

2) Azegami T, Murai-Takeda A, Mori M, et al.: Birth Weight and Risk Factors for Atherosclerosis: A Retrospective Cohort Study in Japanese Workers. Cardiol Cardiovasc Med, 4(3): 158-171, 2020

3) Azegami T, Nishimura T, Murai-Takeda A, Yamada-Goto N, Mori M, et al.: The distributions of hematologic and biochemical values in healthy high-school adolescents in Japan. PLOS ONE, 15(11): doi: 10.1371/journal.pone.0242272, 2020

4) Azegami T, Uchida K, Arima F, Inokuchi M, Murai-Takeda A, Tokumura M, Mori M, et al.: Association of childhood anthropometric measurements and laboratory parameters with high blood pressure in young adults. Hypertens Res, 44(6): 711-719, 2021

- 5) Enomoto H, Makino S, et al. : Dilated Cardiomyopathy (DCM)-linked Heat shock protein Family D Member 1 (HSPD1) mutations cause upregulation of ROS and autophagy through mitochondrial dysfunction . Cardiovasc Res, doi: 10.1093/cvr/cvaa158, 2020
- 6) Harada S, Nishimura T, Takeda A, Yokoyama H, et al. : Control of a Nosocomial Outbreak of COVID-19 in a University Hospital. Open Forum Infect Dis , 7(12) : doi: 10.1093/ofid/ofaa512, 2020
- 7) Inokuchi M, et al. : Population-based waist circumference reference values in Japanese children (0-6 years): Comparisons with Dutch, Swedish and Turkish preschool children. J Pediatr Endocrinol Metab, 34(3):349-356, 2020
- 8) Kanda T, Murai-Takeda A, et al. : Low birth weight trends: possible impacts on the prevalences of hypertension and chronic kidney disease. Hypertens Res, 43(9) :859-868, 2020
- 9) Kawamura N, Yamada-Goto N, et al. : Impaired brain fractalkine-CX3CR1 signaling is implicated in cognitive dysfunction in diet-induced obese mice . BMJ Open , 9(1):e001492, 2020
- 10) Kawamura N, Yamada-Goto N, et al. : Reduced brain fractalkine-CX3CR1 signaling is involved in the impaired cognition of streptozotocin-treated mice. IBRO Rep, 9 : 233-240, 2020
- 11) Nishimura T, Mori M, et al. : The annual risk of tuberculosis infection in newly hired researchers and healthcare workers using interferon-gamma release assay in Japan. J Infect Chemother, 26(8) : 818-822. 2020
- 12) Nishimura T, et al. : The rough colony morphotype of Mycobacterium avium exhibits high virulence in human macrophages and mice. J Med Microbiol, 69(7): 1020-1033. 2020
- 13) Mizuno K, Inokuchi M, et al. : Policy statement of enteral nutrition for preterm and very low birthweight infants. Pediatr Int, 62 (2) : 124-127, 2020
- 14) Uno S, Nishimura T, et al. : Comorbidities associated with nontuberculous mycobacterial disease in Japanese adults: a claims-data analysis. BMC Pulm Med, 20(1): doi: 10.1186/s12890-020-01304-6, 2020
- 15) Yasui Y, Mitsui T, Arima F, Uchida K, Inokuchi M, Tokumura M, et al. : Changes in epidemiological characteristics and sero-prevalence against the varicella zoster virus in school-age children after the introduction of a national immunization program in Japan. Hum Vaccin Immunother, in press, 2021
- 16) Yokota K, Murai-Takeda A, et al. : Mediastinal Cystic Parathyroid Adenoma Diagnosed by Somatostatin Receptor Scintigraphy . Intern Med , doi: 10.2169/internalmedicine.6381-20, 2020
- 17) Yokota K, Murai-Takeda A, et al. : CASZ1b is a novel transcriptional corepressor of mineralocorticoid receptor. Hypertens Res, doi: 10.1038/s41440-020-00562-5, 2020
- 18) 畔上達彦, 武田彩乃 : 高血圧治療ガイドライン 2019 の改訂ポイント. 慶應保健研究, 38(1) : 97-102, 2020
- 19) 有馬ふじ代, 徳村光昭, 井ノ口美香子, 内田敬子, 康井洋介, 長島由佳 : 男子大学生の血圧高値と関連する小学生からの学校健康診断データの解析. 慶應保健研究, 38(1) : 43-48, 2020
- 20) 井ノ口美香子 : 性とは何か からだの性・こころの性 内分泌学的側面から. 小児保健研究, 79 (2) : 109-113, 2020
- 21) 井ノ口美香子 : 小児のやせ(低栄養)をどのようにに評価すべきか 国際的な新たな動きとわが国の現状と課題. 慶應保健研究, 38 (1) : 13-20, 2020
- 22) 岩渕望, 當仲香, 武田彩乃, 畔上達彦, 後藤伸子, 広瀬寛, 森正明 : 特定健康診査における eGFR 判定の意義 (解説). 慶應保健研究, 38(1) : 119-123, 2020
- 23) 内田敬子 : 成人と小児の血圧基準値の意味. 慶應保健研究, 38(1) : 83-89, 2020
- 24) 大山晶子, 横山裕一, 松本可愛, 高橋綾, 澁谷麻由美, 佐藤幸美子, 福富千尋, 西村知泰, 康井洋介, 牧野伸司, 広瀬寛, 森正明, 他 : 本大学医療系学部生における麻疹対策: 抗体価ベースからワクチン接種回数ベースへの変遷および抗体価に関わらない 2 回ワクチン接種の有効性の実証 (総説). 慶應保健研究, 38(1) : 29-35, 2020
- 25) 刈田未来, 當仲香, 松本可愛, 澁谷麻由美, 高橋綾, 横山裕一, 森正明 : 当大学における 2016 ~ 2019 年度インフルエンザ罹患報告. 慶應保健研究, 38(1) : 113-117, 2020

- 26) 後藤伸子, 広瀬寛, 大山晶子, 外山千鈴, 他：総説：特定健診および特定保健指導の目指すもの. 慶應保健研究, 38(1) : 21-28, 2020
- 27) 曾根田瞬, 井ノ口美香子, 他：小城成長研究データに基づく日本人男子の成長 第2編成長学的な基準値を用いた思春期の縦断的な成長解析. 日本成長学会雑誌, 26(1) : 22-27, 2020
- 28) 田中敏章, 井ノ口美香子, 他：小城成長研究データに基づく日本人男子の成長 第1編生物学的定義に近似した成長学的な思春期開始基準値の作成. 日本成長学会雑誌, 26(1) : 16-21, 2020
- 29) 田中敏章, 井ノ口美香子, 他：小城成長研究に基づく日本人男子の成長 第3編 思春期開始の時期が暦年齢、骨年齢に対する成長率に与える影響. 日本成長学会雑誌, 26(2) : 51-57, 2020
- 30) 當仲香：慶應義塾大学保健管理センターにおける健康診断システムの変遷. 慶應保健研究, 38(1) : 103-111, 2020
- 31) 徳村光昭：トレーナーのためのスポーツ医学：小児のトレーニング. 臨床スポーツ医学, 37(4) : 482-490, 2020
- 32) 徳村光昭：子どもの成長発達段階を考えたスポーツ指導. 慶應保健研究, 38(1) : 7-12, 2020
- 33) 伴英子, 康井洋介, 徳村光昭, 井ノ口美香子, 内田敬子, 有馬ふじ代, 長島由佳：小学校から高校生における2018/2019シーズンの抗インフルエンザ薬使用状況. 慶應保健研究, 38(1) : 49-53, 2020
- 34) 広瀬寛, 畔上達彦, 森正明：体脂肪分布、インスリン抵抗性やアルコール摂取は血圧状態と関連する（解説）. 慶應保健研究, 38(1) : 75-81, 2020
- 35) 牟田口絵里, 西村知泰, 佐藤幸美子, 武藤志保, 片岡真有子, 室屋恵子, 福富千尋, 武田彩乃, 畔上達彦, 後藤伸子, 森正明：高等学校における脳しんとうの管理（第2報）. 慶應保健研究, 38(1) : 55-60, 2020
- 36) 森正明, 西村知泰：留学のための診断書における結核検査. 慶應保健研究, 38(1) : 61-66, 2020
- 37) 康井洋介：日本における小中学生の百日咳集団感染—全数報告から判明した百日咳の疫学、診断および予防接種に関する問題点と対策について—. 慶應保健研究, 38(1) : 91-96, 2020
- 38) 横山裕一：飲酒行動の背景となる集合的無意識の存在の提言； ユングの象徴論に基づく考察 —新しいエタノール乱用防止へのアプローチ—. 慶應保健研究, 38(1) : 67-74, 2020

- 39) 和井内由充子, 牧野伸司：健康診断での脳性ナトリウム利尿ペプチド値の経年変化. 慶應保健研究, 38(1) : 37-42, 2020

ウ 学会発表

- 1) 畔上達彦, 武田彩乃, 横山裕一, 和井内由充子, 広瀬寛, 牧野伸司, 西村知泰, 後藤伸子, 森正明：出生体重と成人後のB型ナトリウム利尿ペプチドを含めた動脈硬化リスクとの関連性の検討 第117回日本内科学会総会・講演会 2020
- 2) 畔上達彦, 他：終末糖化産物受容体を標的とした糖尿病性腎症に対する新規治療戦略の開発 第63回日本腎臓学会学術総会 2020
- 3) 井ノ口美香子, 他：日本人乳幼児(0-6歳)における腹囲・腹囲身長比基準値の作成と諸外国基準値との比較 第93回日本内分泌学会 2020
- 4) 井ノ口美香子：子どものやせ・肥満に出会ったら何をすべきか —適正な体重コントロールをめざして— 第123回日本小児科学会 2020
- 5) 井ノ口美香子：The Year 成長 2020 年日本小児内分泌学会特別学術集会 2020
- 6) 井ノ口美香子：遺伝カウンセリング基本の基 第25回小児内分泌専門セミナー 2020
- 7) 井ノ口美香子：やせ —やせによる健康障害から子どもたちを守るためにできること— 第34回近畿小児科学会 2021
- 8) 内田敬子, 徳村光昭, 他：若年成人男性の血圧高値予測因子～小学校からの学校健診データの検討～ 第56回日本小児循環器学会総会・学術集会 2020
- 9) 上養義典, 西村知泰, 他：Gene Xpertを用いた空気予防策解除の妥当性評価 第95回日本結核・非結核性抗酸菌症学会総会・学術講演会 2020
- 10) 刈田未来, 當仲香, 松本可愛, 澁谷麻由美, 高橋綾, 横山裕一, 森正明：大学生のインフルエンザ罹患報告と感染拡大対策 第58回全国大学保健管理研究集会 2020
- 11) 喜田素子, 後藤伸子, 他：体重の増減に伴い過敏性腸症候群の症状に変化が認められた肥満症の一例 第41回日本肥満学会・第38回日本肥満症治療学会学術集会 2021
- 12) 喜田素子, 後藤伸子, 他：減量に伴い過敏性腸症候群の症状に変化を認めた肥満症の一例 第93回日本内分泌学会学術集会 2020

- 13) 岸健太郎, 井ノ口美香子, 他: 小城成長研究データに基づく日本人女兒の成長(第 1 編) 生物学的定義に近似した成長学的な思春期開始の基準値の作成 第 31 回日本成長学会 2020
- 14) 曾根田瞬, 井ノ口美香子, 他: 小城成長研究に基づく日本人男子の成長 健常男子における思春期の伸びに関与する因子 第 31 回日本成長学会 2020
- 15) 高橋綾, 佐藤幸美子, 當仲香, 松本可愛, 中根菜津子, 新谷智子, 武田彩乃, 畔上達彦, 牧野伸司, 森正明: ウィズコロナ(with-corona) の当大学における WEB 問診を用いた学生定期健康診断の実施 第 58 回全国大学保健管理研究集会 2020
- 16) 弦巻美保, 當仲香, 西村知泰, 森正明: A 大学における教職員の 5 年間の喫煙状況の調査 第 58 回全国大学保健管理研究集会 2020
- 17) 當仲香, 岩渕望, 武田彩乃, 畔上達彦, 後藤伸子, 広瀬寛, 森正明: 特定健康診査における eGFR 判定の意義 第 58 回全国大学保健管理協会関東甲信越地方部会 2020
- 18) 長島由佳, 井ノ口美香子, 他: やせの若年成人女性における BMI-SD score の推移(6~20 歳) 第 31 回日本成長学会学術集会 2020
- 19) 西村知泰: 肺非結核性抗酸菌症の疾患活動性の指標(バイオマーカー)について 第 95 回日本結核・非結核性抗酸菌症学会総会・学術講演会 2020
- 20) 西村知泰: 医療従事者の入職健診で IGRA はまだ必要か Pro の立場から 第 95 回日本結核・非結核性抗酸菌症学会総会・学術講演会 2020
- 21) 西村由貴: BupropionSR 精神病を呈した物質乱用障害を有する統合失調症患者 第 116 回日本精神神経学会学術総会 2020
- 22) 広瀬寛, 後藤伸子, 森正明: 教職員健診における血清高分子量型アディポネクチン濃度の測定意義 第 52 回日本動脈硬化学会 2020
- 23) 康井洋介, 他: 学童における水痘発症のリスク因子について 第 61 回日本臨床ウイルス学会 2020
- 24) 四倉絵里沙, 井ノ口美香子, 徳村光昭, 他: 都内 1 中学校における屈折値と過去の屋外活動時間との関連性 第 124 回日本眼科学会 2020
- 25) 四倉絵里沙, 井ノ口美香子, 徳村光昭, 他: 東京都内小中学生における最新の近視有病率と近視関連環境因子 第 56 回日本眼光学学会 2020

編集後記

2020 年度の保健管理センター年報が完成いたしました。

保健管理センターの 2020 年度の活動は年間を通じて新型コロナウイルス感染症の影響を大きく受ける年となりました。本編，資料編のいずれにも影響の大小の違いはありますが，2019 年度までとは異なる点が随所に現れています。

初めての緊急事態宣言が発出された 2020 年 4 月から 6 月にかけては，信濃町地区を除いた全塾での施設利用制限により，一貫教育校および大学が長期の休校を余儀なくされ，オンライン授業を取り入れることになりました。例年，4 月から 5 月にかけて実施していた学生，生徒，児童の健康診断が延期となり，保健管理センター・診療所の利用者も激減しました。一方，新型コロナウイルス感染症に罹患あるいは罹患疑い，濃厚接触者の健康観察や，登校許可のために多くの時間を要することになりました。健康診断の延期や項目の見直し，各種感染予防対策の策定にすべてのセンタースタッフの知恵と経験が生かされた 1 年となりました。

このように多忙な業務の中でも途切れることなく，1 年間の成果を年報という形にして皆様にお届けできることに喜びを感じています。最後に年報作成にご尽力いただきました編集委員，スタッフ，および関係者すべての皆様に心より感謝申し上げます。

慶應義塾大学保健管理センター年報編集委員会

今村江里子

年報編集委員会

編集委員長	徳村光昭	
編集委員主幹	高橋綾 齋藤圭美	久根木康子 今村江里子
編集委員	森正明 井ノ口美香子 武田彩乃 今野恵子 木村奈々 室屋恵子 弦巻美保	横山裕一 西村知泰 畔上達彦 篠塚多恵子 松本可愛 武藤志保 刈田未来 (順不同)

慶應義塾大学保健管理センター年報 2020

2021年8月31日発行

〔非売品〕

発行人 森 正明

慶應義塾大学保健管理センター

〔〒223-8521〕

横浜市港北区日吉4丁目1-1

電話045-566-1055

印刷・製本 (有)梅沢印刷所
